

一 告 告



長谷川 航洋 (はせがわ こうや)  
金沢工業大学  
建築学部  
建築学科三年  
群馬県出身 N高等学校出身

# 「神は細部に宿る」の領域。 精魂傾けた建築模型に驚嘆。

KIT  
キャンパス  
レポート 294  
文・杉村裕之

古代ローマのコロシウムを連想させる四層吹き抜けの巨大な閲覧空間。見上げると、青いドーム型の天井から優しい光が漏れる。国際的に権威のある「iFデザインアワード二〇二四」に輝き、話題を集める新しい石川県立図書館を、五十分の一の断面模型で再現したのが、長谷川さんたち夢考房建築デザインプロジェクトの学生である。

実物を写真で紹介できないほどかじさ。それを補う己の筆力のなさを、今回ほど恨んだことはない。模型は縦二層、横一層、高さ六十センチと大きい。構成するパーツは微細かつ精巧だ。例えば、本は一ミリの厚紙にカラーコピーを巻き、縦四層、横三層にカットした後、一冊ずつピンセットでつまんで本棚に接着してある。少なく見積もっても

数万冊に上るといふ。

大地の茶と木々の落ち着いた緑を、市松模様状に貼った外壁タイルの色調と質感にもこだわった。レーザー加工機を使い、パンチ穴の位置が異なる二層角のメッシュを複数枚作り、重ね塗りした。

約五十名のメンバーが文字通り精魂を傾けた模型にふれ、二十世紀モダニズム建築を代表するドイツの巨匠ミース・ファン・デル・ローエの言葉とされる「神は細部に宿る」を反芻した。解説も理屈も不要の、有無を言わせない感動とはこういうものかと思つた。

プロジェクトでリーダーを務めた長谷川さんの経歴は異色だ。高校二年の秋、通信制に転校した。コロナ禍で登校が週一日となり、出された課題を自宅で解くだけの単調な毎日が嫌だったからと話す。転校後は進級、卒業に必要な単位を早々に取り、後は旅行資金を稼ぐためのアルバイトに明け暮れた。

「京都も好きですが、金沢は観光地や情緒ある旧市街を歩いて回れるので特に好きです」。これが、建築をKITで学ぶ彼の理由だが、このコラムで以前紹介した学生も同じだったことを思い出した。

人の心を吸い寄せる磁場が金沢にはあるのだろう。元金沢市長の山出保さんは、それを「ヒューマンスケールのまちながや」と金沢弁で語った。つまり、歴史や文化や自然と調和し、息づかいや足音の聞こえる温もりが、金沢の魅力を形づくっているとの自負である。

長谷川さんが撮つたお気に入りの一枚を見せてもらった。古刹の庭を借景にしたガラス張りの喫茶店で、新と旧が喧嘩せず、違和感なく響き合っていた。彼流の「ヒューマンスケール」が、上質な吟醸酒のように醸されているのを感じた。

**金沢工業大学**  
石川県野々市市扇が丘七七一  
電話番号 〇七六二四八二〇〇